

原稿控

1949-

文部省撰定教育ノート大學高專用

昭和二十三年度第一回半開分用紙京都大學ノート製造所製造
B列五番正四十枚型NO.六小製業者販賣價格 貳拾圓七拾錢

A.I.

ウマははたして一夫多妻か

ウマをみると、ウマは群れをつくつて生活するところ。それから、その群れには、一頭のオスがいる。それから、その群れのリーダーであり、支配者であつて、何頭かの、ときには十数頭の、メスを従えている。つまり、一夫多妻の生活をしているように書いてある。

これは、ヒマの馬について、述べられたことかしらない。最初の報告を、つまらうきと掲載しているうちに、それからいつの間にか、ウマ一般について、いわれていることのように取扱いをうけ、したがつて読者の方は、ウマ一般のことだと思ひ込んでしまふ。

しかし、人間の生活をつて、いろいろあるのを、部族のように集まつて生活している場合もあるし、田舎でやけに、さびしい一軒家の生活もある。また、おとりの中国で、それから西の方へつづく、いわゆる回疆(回)では、一夫多妻が普通だが、キリスト教国では、一般に、一夫一妻である。

人間のことは、さういふ、ある程度までわかっているから、一と二の一般とは中央アジアの一生活とみて、それと大抵に、人間一般の生活としてみよう。おま、誤りはあかざるであらう。けれども、それがウマのことになると、さういふ誤りが、手氣でかたされてゐる。動物学者の責任である。報告を掲載する者は多いが、自分で動物の生活とを確かめようといふ者が、意外に少ないのである。

ヒマには有史以前から、ウマがなつたらしい。その馬の生活はわかるが、現在のヒマには、野生にふかいウマがいる。高加索の南端に、有明馬

p.2.

と日向灘とのあいだに突き込む、御井岬に、この野生にちかいウマが、80頭ほどいて、人間の保護をほとんど受けて、自然に繁殖している。

これを野生である、という切れない理由：地味との人なすか、毎年、秋になると、この春に生まれたウマの子をみて、オスの子ばかりを捕えようから、このウマは、オスとメスの比率が、野生状態において予想される2:3とは、いかに大きく異なるものになっている。つまり、メスの数に対して、オスの数がはるかに多い。他の点では、野生にかなり近い生活をしている。この点と見比べると、野生にちかいというべきで、どうかと見られるが、

現在は80頭ほどのウマの中に、3頭のオスと、1頭の若オスがいる。ウマがもし、一夫多妻の生活をするのなら、これは、まんの苦勞もなく、その数を増やせるように、仕組まれているといえよう。一頭のオスに平均20頭のメスがある。

しるに、どうなわけか、そういう条件と云えられているにも関わらず、このオスは、2頭までか、忠実に1頭のメスとまっついている。これだけを見れば、ウマは一夫一婦制、というべきであらう。けれどそのオスは、逆縁型で、いつもちがったメスをつれて歩いている。そのうえ、このオスだけでなく、3、4頭もつれておれば、まず威勢のよい方であつたから、これは本に書いてあることだ、いこうに当てはまるものがある。

このようにオスの勢力を振りかざすのは、そこには、オスからなされて生活しているメスも、たくさんいるわけだ。本に書いてあるように、ウマが

p.3.

もし群れをつくつて生活するものなら、そこには、オスにリードされる、

メスはかりの群れか、ではよいのであろうか。

しかるに、この点も、じつさいに調べてみると、われわれの予想のよう

なことはわかつた。メスの中には、何頭か組んで、いわゆる群れをなす

て生活しているものもある。しかしまた、一頭だけで生活しているものの数も、

意外に多いのである。また、群れをなすといつても、せいぜい5、6頭までの

群れである。最もあたりの大群は、大なる男群と見られた眼には、これぞ

群れかといいたくなる。

もっとも多尾期には、事情がすこしちがってくる。この時期には、メスの
方から群れ外に、オスのひとりづつ出向いてくるのである。そしてそこは、オス
を中心とした、一時的な交尾集団がでる。そこを4と見れば、一夫
多妻のやうにも見える。しかし、多尾の頃にはメスは、さうさ引きまがせて
しやうので、メスの群れにはつねに交配があり、集団もある。大まか
には、大まかなうまい。なかには、このやうな集団で、メスのあいだにオス
の取りあひが、おこるやうなことはあつた。

人間では、ヒミコによつて、男年女年のヒミコもあれば、男年同士の
ヒミコもある。うまなうて、一律に置き換えられないものであつて、よい
であるまいか。そのうえうまは人間より、セックスによる差が大きい。
ゆえに、オスよりヒミコメスといふ。11-5-とか、5-11-とか

に居るものが、何かにまるとすれば、オスにまると、メスにまると、
合さるゝといふであらう。

一夫一妻か、それと一夫多妻か、という問題にまると、ウマの社会
には、これを素向きな法律というものが無い。しかし、人間の社会
だと、法律の何れを何れか、~~いふといふ、一夫一妻のものをいふは、~~
定めるとしては、一夫一妻という二つになつてゐても、ヤミでは一夫多妻
のものも、あるいはその通り、一妻多夫のものもあるであらう。またそれと
とは、年頃とととにかわりもしょう。ウマになつて同じお困るゝる
何所を、あつてよいのか。

下に書いてある二つを、どへてと適用すると思つてはいけな。い。
それは、一つのケースとして、正しいとは思ひ。高等動物の生活は、
もう少しバリエーションに富んだものである。(1949.6.5)

「動物の社会」

1

自然状態にある動物の生活を見れば、いかにさまざまにあるか、われわれの眼に、その動物が、単独生活をしているように見える場合と、集團生活をしているように見える場合とがある。デューナーという動物学者は、集團生活即ち社会生活、あるいは集團現象即ち社会現象であると考へた。ただし集團という字、その成員はかゝらずに多岐に亘る。二匹の動物が集合したければ、それはすでに集團現象であるが社会現象である。また、三匹以上を集團状態と、かゝらずに集つてしまふと云い、一匹の現象であつても、集團現象はこれ社会現象である、と考へた。

すると、下等動物はしづかなく、雌雄の間にのみ、繁殖のために、雌雄がさんざんの形、集合してそれらをつくる動物であつて、一時的にすぎ、かゝらずに社会現象が、何れのものともなはれはならぬ。高等動物に、われわれの眼に、単独生活をしているように見える動物であつても、彼らの一生の中に、すくなくとも一度は必ず、社会生活といふものが、雌雄の結合を介して、現われざるを得ない。

では、集團といふは、たゞに社会と見てもよいのか、デューナーはそうは解してゐない。集團といふは、個人の偶々、幾つを合わせたものを集團は社会ではない。社会現象ではあつても、また個人どうの社会と現れた現象ではない。その集團の構成要素、各にあり、お互ひに、相手から得る利益を求め、集まつたような集團だが、個人どうの社会であるといふのである。

社会現象の要は、個人どうの社会と現れた現象と、同じである。この社会を現れた現象とある、といふ事と違ふ。と思ふが、その見方は、集團をつくることによつて、利益を得るものである。といふことにあるとすれば、これは否か否かといふ事である。否とすれば主観的な現象に、幾つしようがそれがあるからである。

社会といふものの定義は、どうして下すことが出来るか。と云ふ。

いままでの動物社会論は、人間社会論（一般の社会現象）と、動物社会と見ようとした、社会というものを、互にか、われわれの理解しようべき実体であるかのように考え、集團現象と社会現象とあると見たのは、その現われである、そして、その中から分け、それぞれ60分ぐらいは異なるもの、同じにうつる、同じもの、1個だけ、目的だけ、といったものを導き出したもの、踏み合せてしまったのである、その点に注意する必要がある。

二、前章の動物社会論を要するようにして、あらに、われわれの前提とした、動物における社会という考えは、つまりどうなるものがある、動物には、一時的な集團をつくるものがある、比喩的に永久性を集團をつくるものがある、また、それをつくることにより、その動物が利益を得るものがある、集團とある、得るものがある、集團とある、しかし、いずれにしても、かかる集團がつくられる、可能性のあるものである、社会と考えるのである、いままでの、動物の社会観と、ほゞおなじく、そのように印象を、与えるかも知れない。

集團がつくられる可能性のあるものは、同時に、集團がつくられる可能性のあるものがある、それが社会とあるとすると、社会にたいしては、集團がつくられることとあり、いかにこととある、社会にたいして生じている現象が、すべて社会現象であるならば、集團現象が社会現象であるのと全く同じに、非集團現象もまた一つの社会現象である、両動物が集團をつくることと、その動物が社会現象として取りあげられるのと全く同じに、真実はない、他の動物が集團をつくるものというとき、また、その動物が社会現象と受け入れられる。

集團がつくられる、つくれるというものは可能性の設計、というべきでない、むしろむしろ、非実体的な印象を与えるべきではない、そこにはやはり実体的なものを考えられているのである、それは、その内容にたいして、集團がつくられていかにあるまいか、ある集團、あるいはあると成り立つ、同種の動物のうちのものを考えられているのである、それは、その動物のうちのものを社会とせよ、そのうちに展開するものである、それは一般社会と考えるものである、

まあ、つくりはよいから、左に上へくづみかえしてほしい、つまりこの
ツバネ、ツバネにかけの101本とは101、一匹一匹の動物が、花の
前をぬいてまわっている像を、あれをわれわれは常盤樹に、101本と
思っている。あるにあらばは生活能力をいかに、さるるあつたは失
格だ、そんならわれわれの女王様は？ あれは生活能力があるからとて、
自ら「花」を養つてゆくこととてまわらう、同様に失格、つまりツ
バネは、咲く花一花と自ら「花」を養つてゆくこととてまわらう
像を、三つと、一つに三つと三つに、はじめて定款の像を101本と
欠けられるのである、ツバネの口から、花がはらわつて感ある
ると、またそれの4の分所は4つある。

かといふ身像の法をこれツバネ——であるツバネに欠けられた10
像を、とくに超101本の101本といふことである——にこれつては、
身像を一つに、つづつての5つと5つと5つと、その手裏花が印と、
生活樹が印と、それそれの101本とみること、どういふこと
とてとて、それはあるか、一木の、手裏花が印と、一花
一木の、生活樹が印と、一木の、一木の、それそれの10
像とみることといふ、さういふ、それは101本という用語の
無規定を適用である、

われわれが、エスピノサデッドの動物社会をいかに、
そのまのまゝに、これ101本の101本と、それらをつまみ
（集）のために、さういふ（集）——さういふ、われわれの身像を
一木の、それそれの、つづつての、ツバネの、超101本の101本
か、そのまゝ、いかに動物社会の一方代表者であるか、さういふ、
それそれの、それそれの、動物社会の、それそれの、それそれの、
それそれの、それそれの、それそれの、それそれの、それそれの、

(1949. 6. 8),

[illegible]

① 国民の地位 大正12年、第一次大戦の終結と共に、世界は激変した。戦前の世界は、列強の覇権による支配の時代であった。戦後は、列強の覇権が崩壊し、民族自決の時代となった。この時代、国民の地位は、国家の主権者として認識されるようになった。国民は、国家の主権者として、国家の政治に参加する権利を得た。この時代、国民の地位は、国家の主権者として認識されるようになった。国民は、国家の主権者として、国家の政治に参加する権利を得た。

[illegible]

(14-7. 7. 7)

1876

[illegible][illegible][illegible]

別の方面より考察するに、同様の傾向は、他の方面でも見られる。特に、生活の質の向上、教育の普及、医療の進歩など、社会の発展に伴って、人々の生活は豊かになり、健康も増進している。これは、現代社会の大きな特徴である。

共同生活の発展 一方、共同生活の発展も著しい。特に、都市部では、共同生活の質が向上し、人々の生活は豊かになり、健康も増進している。これは、現代社会の大きな特徴である。

共同体の形成 共同体の形成も著しい。特に、都市部では、共同体の質が向上し、人々の生活は豊かになり、健康も増進している。これは、現代社会の大きな特徴である。

一方、共同体の形成も著しい。特に、都市部では、共同体の質が向上し、人々の生活は豊かになり、健康も増進している。これは、現代社会の大きな特徴である。

群衆社会がある。これは尚ほの一寸前までいた群衆社会と、
人回を現・回しと矛盾するより、むしろ群衆社会の尚ほを承けた方
が、やましくはないか。そして、その点で、またまた1015年迄の社会を認
められるのである。しかし、その1015年というのは、人回の年とその子孫である
衆族に、その経済的力が加わった、一種の1015年対1015年である。

人回の最初の社会における（最早1015年）乱闘であったが、一夫多妻と
あったが、それと一夫一妻であったが、このことと、その社会が、群衆社会
の社会であったが、それと1015年迄の社会であったが、その点によって、
その社会の解決する問題である。群衆社会の尚ほとするとその社会に連
面した人回の中に、一015年の衆族とあるようにその経済的、政治的
な方がよい。

(1950. 10. 31)

「 $\angle 10$ 」の $\frac{1}{2}$ は $\frac{2}{5}$ より4」

所をいふそのが、他人に對しての自分であるように、人間といふのがまた、人間以外の生物に對しての自分である。これが「商業」である、つまり生物の一員としての人間の位置づけを規定するが、この2つの「存在」の異なる人間の位置づけである。

人間はそれには、生物学的に比してはより進み、かつ生物学的に最も最近の一系に属する、よりよく出現したものである。しかしそのことは否に任ぜ、人間の別な生物学的特徴として人を知ることが出来る、という点を意味してほいたい。それは19世紀の生物学者が知らないうちに、人間という1種の生物は、生物の中で最も進んだ生物であり、よりよく生物であるものとして認めて、80歳の生物学者が、許すにほかにその家を築いたことに、それより進んだ生物であり、その最もよく知られたものはよりよくある。

20世紀のわかれわかれは、45年と2年戦争により、戦後のわかれには大きな、悲劇とともにはたわいの、11世紀の東部王政、約1人間の災害に響く入、わかれとある。2022年1度、人間の信託がよりよいとされる。

自然界に於ける人間の位置、という質問は、是等の位置、を1枚の紙に人間の位置がつかぬ位置とする、人間を採集用に1人だけ切り出し、標本にし、ほかの動物の間に並べこする事、この事をいうが、すなわちの身体を、物数としてゐる事といふのは、人間だけの適用でないから、動物にだけ1/10の生物としての人間は、どう見たて犬・猫より高貴な存在、自然に於ける人間は1番高貴な存在で、といふ事になる。

すると、人間は異なると、2人1843年の生活に比べて、大分進歩の生活と覺つたから、人間は社会和生活で發展するといふことがわかつた。二つは、その間に、それと從來の生物の間に大きな差がある。より人間の安全と云ふことがわかつた。

そして、人間は其の社会生活を、野菜・果物の状態から、今日のよう文明の状態にまで発展して来たという社会進化論は、何故に正確として生物進化論の如きより前なら、存在し得るものか。何故に社会進化論と社会進化論とは

